

花賣りの遊び

お　　さ　　な

五六人の子供でも、夫よりづつと澤山な子供でも出来ず、其中の一人が花賣りになって、残りを買手になるのです。遊びの用意には、いろゝの色の菊の花だの、牡丹だの、梅だの櫻だの、躑躅だの椿だのを造つて置きます。

そこで、大勢の買手が、ずらっと一列か、又はまるく揃つて并んで居ると、賣り手になった子供が、赤い菊なら菊を籠に入れて、分らぬ様に蓋をして、買手の并んで居る前を次の様に歌つて通ります。

「私は花賣り、赤い花賣りませう。」

調 5.5333/2.1666/55113/2.2311//

ソ　　シ　　ハ　　ハ　　ナ　　カ　　ヲ　　テ　　カ　　イ　　ハ　　ナ　　ー　　カ　　ヲ　　イ　　マ　　シ　　ヨ

「私を買ひましよ、その赤い花を」

調 5.5333/2.1666/55113/2.2311//

ソ　　シ　　ハ　　ハ　　ナ　　カ　　ヲ　　イ　　マ　　シ　　ヨ　　ソ　　ノ　　カ　　イ　　ハ　　ナ　　ー

と、歌つて仕舞ふと、買手の一番先の子が、其赤い花の名を言つて買ひます。例せば、「牡丹を下さい」といつて見る、所が賣り手の持つてゐるは菊ですから、これは間違つた。そこで第二番の子が「赤い菊を下さい」といつて、言ひ當てると、今度は其子が、花賣りになつて、前の花賣りが、買手の一番後に并んで、今度は新しい花賣りが白い花でも黄な花でも、なんでも好きなものを持つて、其色を歌つて歩くといふ風にするのです。